

第8回松山市総合教育会議 会議録

【開会】

【市長挨拶】

(野志市長)

- ・今年も新型コロナウイルスの影響で、教育活動に様々な制約が生じたが、教育委員会や学校現場の皆様の知恵と工夫により、多くの学校で運動会や体育祭が保護者や地域の方に見守られながら開催できたことは、子どもたちにとっていい思い出になったと思う。
- ・現在道後温泉本館は後期工事の期間に入っているが、前期工事の顔を務めた火の鳥ラッピングアートのテント膜が、関係者の皆様のご厚意で再利用され、道後小学校、湯築小学校に寄贈された。今後ともこうした取り組みを始め、SDGsや教育活動を推し進めたい。
- ・松山の未来を担う子どもたちが伸び伸びと学んで健全に成長できるよう、また、松山を愛し、誇ってもらえるよう、あらゆる場面で皆様方と意思疎通を図りながら、松山の教育行政の発展に努めていきたい。

【議題(1) ①SDGs教育の推進について】

(野志市長)

- ・松山市は昨年7月にSDGs未来都市と自治体SDGsモデル事業に選定された。両方に選定されたのは、四国では初めてのこと。
- ・これまで、エコリーダーの派遣や体験型環境バスツアーなどの環境教育、平和の語り部の派遣や、掩体壕・平和資料展の見学会などの平和教育、そして切れ目のない全世代型の防災教育など、身近なことから我が事として考える機会を作り、小学生中学生に向けたSDGs教育に繋がる取り組みを実施してきた。
- ・昨年11月には、松山国際交流協会やNPO法人、小学校の先生のほか、子どもたちが使う教材に深い知見を有する、株式会社学研プラスにも参加していただき、小学校高学年がSDGsを優しく理解できる冊子『みんなで始めよう！未来のためのSDGsハンドブック』を作成した。この冊子は、17のゴールの解説だけではなく、世界に誇る松山の観光資源や自然環境、世界との繋がり、俳句文化などを学べる内容になっていて、すでに一部の小学校では使っている。
- ・今後も、長期的な視点を持って地域一丸となって、持続可能な社会に向けた人材育成を進めていきたい。
- ・持続可能な地域づくりのために、未来の松山を支える子どもたちの存在は欠かすことはできない。

- ・そこで、ふるさと松山学や、松山らしい特色ある教育によって、未来を担う子どもたちに、地域への愛着や誇りを育み、持続可能な地域づくりに取り組めるよう、教育委員会としても、SDGs教育をさらに推し進めていただきたい。

(松坂委員)

- ・これまで松山市内の各学校は、環境教育、福祉教育、キャリア教育や人権教育といったテーマを教科横断的に、また総合的に学ぶことができるように、学校の実態に応じた指導計画を作成し、市が実施する事業などで、外部講師の支援を仰ぎながら、様々な取り組みを行ってきた。
- ・私も現職のときは、国際理解教育やふるさと教育などたくさんのテーマに熱意を持って取り組んでいたが、当時はそれぞれのテーマの重要性は認識していたが、それらのテーマにまとまりがないように感じていた。
- ・そうした中で、数年前から、ESDや、SDGsという言葉を目にするようになり、大きな目標のもと、まとまりのある一つの方向性が出てきたと感じるようになった。
- ・今期の新しい学習指導要領では、「持続可能な社会の創り手の育成」ということが初めてはっきり示された。現在、新学習指導要領にのっとった教育活動が始まっているが、各学校にとっては、これまで取り組んできた課題やテーマをSDGsに照らし合わせ、活動の目標をより明確化したり、新たな意義や価値づけを行ったり、今後向かうべきテーマを掘り起こしたりするなど、絶好の機会ではないか。
- ・私たち教育委員は、一昨年度、昨年度と小中学校の教科書採択にあたり、SDGsの視点も視野に入れながら教科書を吟味してきたが、昨年7月に松山市がSDGs未来都市、自治体SDGsモデル事業に選定されたことを伺い、未来の松山を支える子どもたちにしっかりと学びをさせたいという思いを強くした。
- ・そのためには、学校だけではなく、家庭、地域社会での学びも重要であり、SDGs教育の出発点も大事ではないかと考えていた。
- ・教育委員と教育委員会事務局との意見交換の際に、小学校高学年向けに市長部局で作成している冊子『みんなで始めよう！未来のためのSDGsハンドブック』を有効活用するのはもちろんのこと、松山の子どもたちは、小学校の低学年から、SDGsという言葉を知っていて、学年や発達段階に応じて理解を深めたり、活動を広げたりする取り組みにしていきたいということになり、資料作成などの具体案を検討している。
- ・既存の笑顔あふれる学校づくり推進事業はその成果を継承し、SDGsの視点を強化した内容にリニューアルすることを予定していると聞いている。
- ・さらに、例年2月に実施している教育研修センターフェスタで、今年度はSDGsをテーマにした公開授業を、愛媛大学と連携して行うことになっている。
- ・持続可能な地域づくりへの市長の熱い思いと、持続可能な社会の創り手である子どもたちの育成という私どもの思いは、重なり合うものと考えており、教育委員

会としてもしっかり取り組んでいきたいと思っている。

(緒方委員)

- ・私も3年前まで教育現場にいたので、教育現場にいたことを踏まえ、話させていたきたい。『みんなで始めよう！未来のためのSDGs』の16ページに「アフリカのモザンビークと平和とエコの支援活動」というページがあり、えひめグローバルネットワークの竹内さんのお話が出ている。私も学校にいた時に、竹内さんに平和の語り部ということで授業をしていただいた記憶がある。何よりも印象的だったのは、今まで使われていた武器を切断して作っている人形の作品の写真。こちらを向いている顔のような丸い部分は、鉄砲の銃口ではなかったかと記憶しているが、非常に心に残った。
- ・平和の語り部派遣事業の実施は、SDGsという言葉が知られる何年も前のことで、10年以上前から松山市はこつこつと活動していたように思う。
- ・このように、従来の教育の内容にもSDGsの内容と同じものがある。
- ・人権教育や環境教育、平和教育などたくさんあるが、それらが別々に、独立した形で進んでいたのが学校の現場の実情ではなかったかと思う。
- ・新学習指導要領でも、持続可能な開発のための教育というものが求められている。
- ・『みんなで始めよう！未来のためのSDGs』には手引き書が作成されており、SDGs教育をどのように進めていくか、子どもにも教師にもわかりやすくまとめていただいている。
- ・その中で何より嬉しいなと思ったのは、最後のページに俳句を使ってSDGsを考えようという項目があること。松山市教育委員会では、子規と俳句に関する教材などを、以前から作成し、ふるさと松山学というのを進めてきた。
- ・SDGs教育も、ふるさと松山学、ふるさと教育も、やはり同じ方向性を持ったものではないかと確信した。今後も市長部局と連携を深めながら、松山の子どもたちのSDGs教育が進むものと考えている。
- ・今後、教育委員会の学校訪問で、松山のSDGs教育という視点でも、学校を見て参りたい。

(白石委員)

- ・SDGsは様々な問題がからまった糸のようになっていて、大元に環境問題があると思う。
- ・それに対して、SDGsでは17の目標や169のターゲットがあり、それらは「P e o p l e」人間、「P l a n e t」地球、「P r o s p e r i t y」豊かさ、「P e a c e」平和、そして「P a r t n e r s h i p」協力という、大きな5つのPに分類されている。
- ・松山市民の生活ではそのどれもが大切にされていると感じる。
- ・核家族化や多様化を認めながら、パートナーシップ、協力を大切にするというこ

とは、特に知恵や工夫が必要なことだと思う。

- ・環境教育交流があるフライブルク市から送られた電話ボックスが中央図書館の除籍本のリサイクルボックスとして生まれ変わったことや、小中学校の太陽光発電システムは、子どもたちにとって身近なSDGsである。道後温泉本館工事の、火の鳥ラッピングアートのテント膜が学校のテントにリサイクルされたことも記憶に新しい。
- ・小学校での町探検や中学校での職場体験などの授業にも、SDGsの視点を取り入れて考えることを深めることができるように思う。
- ・社会教育の分野では、公民館や放課後こども教室などでも、SDGsの視点を持ってプログラムを実施し、SDGsの浸透を図ることができると思う。
- ・松山市小中学校PTA連合会でも様々な団体との連携があり、それぞれが様々なバックボーンを持っているので、多様な協力関係の大切さを子どもたちに伝えることができると思う。
- ・こういった取り組みが単なるその時の話題として終わることなく、協力や交流から生まれた知恵や工夫をこれからももっと広げることが、SDGsの推進に繋がると思う。

(一色委員)

- ・学校では低学年の子どもからSDGsの理解が相当進んできている。
- ・私ども経済界は、理解が子どもより遅れているのではないかという危機意識を持っており、観光業界を含めた企業はトップが率先してやろうということで今取り組んでいる。
- ・大企業になればなるほど、企業の行動指針の中に今やもうこれを書き込まなければ、その会社は評価されないという時代になりつつある。経済界のトップが率先して理解を進めていく時代になっていると思う。
- ・各家庭でも、子どもの方が理解が進み、保護者の方の理解が遅れているということになる可能性があるが、私ども経済界も子どもに負けないように、この問題を率先してやっっていこうと思っている。
- ・特に環境問題を含めたまちづくりもこの視点が重要だと思っているので、観光業界含め、SDGsを推進していくという考えである。

(教育長)

- ・冒頭の市長挨拶にあったように、昨年から新型コロナウイルスの制約の中で、先生方を含め、学校では本当に色々な努力をしている。
- ・SDGsにも関わってくるが、コロナの状況の中で、子どもたちはみずからの命はみずから守るという強い認識に立ち、そういう生活がだんだん浸透してきていると思う。今後もそういった形で感染防止に努めなければならないと思う。
- ・委員のみなさんとは、教科書採択の際に、SDGsの関係について配慮をした中

で、子どもたちが理解をするためにどうしたらいいかを考える必要があり、議論をさせていただいた。

- ・松山市は昨年SDGs未来都市、自治体SDGsモデル事業に選定されたが、子どもには、発達段階に応じた教育が必要である。
- ・「それぞれの問題はバラバラだが関連性がある。SDGsだから、この授業をやる」では、なかなか子どもたちには理解しづらい。発達段階に応じて、訓練をしていくような教育が大切であると思う。そのためには、『みんなで始めよう！未来のためのSDGs』は本当にありがたい。
- ・今まで市長には、防災教育や環境教育についてかなり力を入れてきていただいたと思う。
- ・今後は特別交付という形で、目標に繋がる活動があれば、検証し、評価してインセンティブを与えることで、取り組みが市内全部に広がるようにしていきたい。
- ・今後現場としては、SDGsの推進が、すべての小中学校に広がっていくことが大切である。

(市長)

- ・現場の先生方はただでさえ様々な役割がある中で、日々感染症対策に気を付けながら学校での活動に当たっていただいております、本当に頭が下がる思いである。
- ・SDGsについて、教育現場で冊子を活用して取り組んでいただいていることは非常にありがたく思う。市民の皆さんにわかりやすくしていく方法として、17の目標がちょうど俳句の五・七・五の17と同じなので、これを関連づけて啓発できないかと考えた経緯がある。
- ・SDGsは学習指導要領の中に盛り込まれ、学校教育の中で必ず学ぶことになる。SDGsに取り組んでいるかどうかは、大学生が企業を選ぶポイントで重要な項目となっているとも聞いており、しっかり取り組んでいかなければと思っている。
- ・今日の話で、学校現場でSDGs教育にしっかり取り組んでいただいていることがよくわかった。また引き続きになるが、ふるさと松山学や松山らしい特色のある教育によって、未来を担う子どもたちに地域への愛着や誇りを育ていただき、持続可能な地域づくりに取り組めるよう、教育委員会としてもSDGs教育をさらに推し進めていただきたいと思います。

【議題(1)②教育の情報化の推進について】

(教育長)

- ・本市では、児童生徒1人1台の端末が今年の2月に完備され、環境が整えられた。松山市GIGAスクール構想の実現を目指して鋭意努力をしているところである。
- ・特に研修センターを中心に、1人1台端末の活用に関する検証の実施に加え、昨年度の総合教育会議で議論をしたICT支援員については、当初から20人の配

置をしていただいた。

- ・学校からも、教職員、教員のタブレットの活用頻度が飛躍的に上がったという意見も出ており、本当にありがたく、さらにICTを活用した教育の推進に繋がっていくと思っている。
- ・一方、学習者用のデジタル教科書の本格的な導入などには、なかなか国の動向が不透明な部分がある。補助でみると言いながら、梯子を外したような形もあり、それを市費で賄っていただくような形もあった。
- ・そういった実態を踏まえると、自治体の財政的な負担はさらなる増加が懸念される。
- ・松山市も他市にもれず財政的には大変厳しい状況であり、教育委員会として今後も中核市教育長会等を通じて要望していくが、市長からもこれまでどおり、市長会を通じて予算の確保に向けて要望いただければありがたい。
- ・学校現場では、今後、ICTを活用した授業改善に加え、教職員の働き方改革が大きな軸になると思う。
- ・今後、校務支援システムの再構築なども必要であると考えている。
- ・今後とも、市長におかれては、国に対して要望していただくとともに、次代を担う子どもたちへの教育をさらに充実をさせていくためにも、引き続き教育の情報化の推進にご支援をいただきたい。

(松坂委員)

- ・子どもは本年度の6月から、18の小中学校を訪問させていただき、GIGAスクール構想に基づく松山市の取組は順調に進んでいるという手ごたえを感じている。
- ・先生方の意欲と努力、また子どもたちの興味・関心や習得は、ほとんどの学校で予想以上であると感じた。
- ・タブレットを活用した授業を数多く参観し、その後行われる研究協議の場でも、ICTをどう活用すれば、子どもたちの主体的で深い学びに繋がるかといったことが、日頃の実践の悩み、それから成果などを踏まえて、熱心に話し合われていた。
- ・1人1台端末を配置した初年度の取り組みであるので、まだまだ様々な課題も見られるが、教育委員会としては、長年の教育活動で蓄積している有効な教育手法と最先端のICTとを上手くミックスさせる、両者のベストミックスで、児童生徒の学力向上を目指す取り組みをして欲しいという指導をしている。
- ・また、学校差、学級差、それから指導者差が生じないことが大事だと考えており、それには教育研修センターとICT支援員さんの尽力がなくてはならないという思いを強く持っている。
- ・教育研修センターは、集合研修や訪問研修の機会を数多く設けて対応をしてくれている。また、自己研修に繋がるハンドブックを作成したり、ホームページに関

連サイトを立ち上げ随時更新したりするなど、先生方を先導する役目を着実に果たしてくれている。松山市に教育研修センターがある、その意義と成果を改めて感じている。

- ・12月からは、タブレットの家庭への持ち帰りの計画も進めている。
- ・20名いるICT支援員はその道のプロなので、各学校の実態に応じた研修や各教員の実情に応じた指導をしており、タブレット活用推進の大きな原動力になっていることは間違いない。
- ・私の先輩に、音楽の時間講師としてある小学校に指導に行っている方がいる。タブレットの活用方法をICT支援員に具体的に教わり、これからはもっと充実した音楽指導ができると目を輝かせて話していた。
- ・ICT支援員の活動時間について、学校現場からは拡充の声もある。ICT支援員の適切な配置について、しばらくは引き続きご配慮をいただきたい。
- ・教育の情報化には多大な経費が必要で、国の動向に今ひとつ不透明なところがある。1人1台端末の活用や、学習者用デジタル教科書の今後、統合型校務支援システムの導入などの財政負担について、教育委員会と市長部局とが連携をして、声を上げ続けていけるようお願いしたい。

(緒方委員)

- ・今年度、教育委員会の学校訪問が1学期から始まったが、多くの教室でタブレットを使った授業が実践されていた。1学期よりも、2学期の10月11月の学校訪問の方が、子どもたちも先生たちも急速にタブレットに慣れてきて、充実してきたなという実感があった。
- ・ただ、教育の世界でありがちなことだが、新しい教育方法や視点が示されると一気にそちらに傾いてしまうということがある。例えば、詰め込み教育が批判され、いわゆるゆとり教育になり、ゆとり教育として授業時数の削減や軽減がされ、そちらにずっと傾くと、それでは駄目だということでもた今度、揺り戻しのようなものがある。
- ・そのように、本来の目的が見失われてしまうということが今までもあったわけだが、ただ、今回のタブレット導入も、タブレットさえ授業で使っていれば、教育は足りるのではないか、タブレットを使うことだけがその授業の目的になってしまうのではないかという心配があった。
- ・松山市教育研修センターでは、研修センターを中心に、タブレットをツールとしてどのように授業の中で使っていけばいいか、また、リモートの授業をどのように進めていけばいいのかといった研究も先行してどんどん進められているようなので、タブレットが最大限に力を発揮できる教育が、今後一層展開されていくのではないかと期待をしている。
- ・一方、教育の情報化で教師の働き方改革の一助になる統合型校務支援システムについて、松山市は他の市町に先んじて、平成10年から松山市の教育総合支援シ

システム、メッツ(METSS)というものが導入され、学校事務の効率化に非常に大きく寄与してきた。

- ・メッツは次回の更新が令和6年度だそうだが、今後は国が示した標準仕様を満たしたものへ移行しなければならないと聞いている。メッツが発展的に更新されることを期待している。市長部局の方からも何とぞお力添えをいただけるとありがたい。

(白石委員)

- ・学校教育のICT化は、未来に向かって増していくということはあるけれども、衰退するという事はないと想像できる。今年はコロナ禍ということもあり、例えば大学生などは授業のみならず、就職活動もオンラインが多用されている時代となっている。家庭教育、家庭学習の場でもオンラインでの塾などが広がっているようだ。
- ・数年前にはこんなに早くICT化が進むとは予想できなかったが、先生方がこの急速な流れにICT支援員や教育研修センターの方々と協力して対応してくださっている姿を学校訪問の際に見かける。
- ・毎日より良い教育のために頑張っている大人の姿が、子どもたちには課題解決の重要性として伝わっており、考えて協力するという学習態度に繋がっている。
- ・一方で、保護者はまだデジタルネイティブと呼べる人が少なく、子どもの方が詳しいという現状がある。メディアリテラシーや、IT機器の適正な利用方法を身に付け、Society 5.0の、またその先の社会を担う大人になるためにも、義務教育の期間に学校で資質や能力を育成していくことが重要なことだと思う。
- ・ICT化は目に見えないものにお金と時間がかかるというものであると思うが、今後、推進していけるようにお願いしたい。
- ・余談にはなるが、地域の公民館で市とシルバー人材センターが主催のスマホ教室というものを開催しており、とても盛況であったということを知っている。大人、特に高齢者も取り残さないような取り組みも求められているのではないかと思う。

(一色委員)

- ・今の小中学校の先生は、教員採用選考試験に英語とICT教育が想定されておらず、私としてはどう対応するのか懸念があった。
- ・学校訪問をしてみると、教育研修センターの指導のおかげで、我々が想定した以上に学校現場でICT教育が進んでいると感じ、大分懸念が払拭された。
- ・松山の教育研修センターの役割は、この展開についてもものすごく大きいと感じた。
- ・残念ながら、ICT教育については我々が少し遅れていると感じる学校もあり、今後は学校間格差、あるいは先生による学級間格差が出る可能性があり、我々も用心して見ていく必要がある。

- ・G I G Aスクール構想の国の補助金について、一斉に端末を入れていただいたが、来年度以降のランニングコストについて、国がどこまで面倒見てくれるのか不透明である。逆に言えば自分たちでやれということであれば松山市に多大な財政負担を強いることになる。導入した限りは、国にも育てる義務がある。ランニングコストの支援について、引き続き各方面から要望していただき、このG I G Aスクール構想がうまく進むよう財政面での支援をお願いしたい。

【市長】

- ・新型コロナウイルス感染症の影響で、例えば臨時休業であったり、修学旅行が延期になったり、部活動が制限されたり、入学式の縮小実施など、様々な制限があった。
- ・そういった状況だからこそ、子どもたちの学びを保障するため、教育現場での情報化の重要性を改めて認識した次第である。
- ・今年2月に、小中学生全員に1人1台端末が整備され、授業でタブレットやアプリの使用が進んでいると伺っている。
- ・教職員の働き方改革は過去の総合教育会議でも議論したが、外国語教育も含め、学校現場に求められる役割は多種多様化している。そのような中で、G I G Aスクール構想も学校現場にとっては大きな変化であり、先生方は大変だと思う。
- ・S D G s の目標の一つに「質の高い教育をみんなに」とあるが、目標達成のためには、先生方の負担を軽減し、子どもたちにしっかりと向き合える時間を確保することが大切だと考える。
- ・厳しい財政状況の中、情報化の推進を実現するためには財源の確保が必要。
- ・学校の教育のI C T化の推進に関する財政措置については、全国市長会から国に対して要望をしている。
- ・今後も引き続き、他の自治体とも協力をしながら、国に働きかけていきたい。
- ・松山市は51万都市で、全国の中でも大きく、存在意義も大きい。全国市長会や中核市市長会の中で、引き続きしっかりと訴えていきたいと思う。
- ・教育委員会では中核市教育長会などもあるので、しっかり連携しながら訴えていきたい。
- ・本日は、教育委員の方々とこのように議論することができて、とても有意義な会になった。今後とも教育委員の皆様と連携を密にしていきたい。

【閉会あいさつ】

【教育長】

- ・S D G s については幼稚園、小学校、中学校の12年間で、それぞれの発達段階に応じた粘り強い教育と意識づけが必要だと思う。
- ・特に防災、環境は今もうすでに取り組んでいる。今後、食料問題や町おこしなどにしっかりと取り組んでいきたい。

- ・ICT教育について、本市の教育研修センターは日本一の研修センターだと自負している。コロナ禍の中で、双方向であろうと単方向であろうと、いろんな形で家庭との教育ができるような準備ができている。
- ・オンライン授業の実施にはその家庭の協力や子どもたちの力のほか、いろんな努力も必要であると思う。粛々と準備できるように、研修センターで対応はとってもらっている。
- ・今後我々が考えなければならないのは、効率的なタブレットの使い方である。先生方は、高いお金を使って配備してもらったタブレットを使わないといけないという意識があるが、そこは考え違いしないでしてくださいと言っている。
- ・我々がこれまで蓄積した教育実践は、ICT以上に大事なもので、ICTはそれを利用するツールである。教育委員の皆さんの意見をもらいながら、今後は学校間や学級間で格差が生まれないう、しっかり取り組んでいきたい。
- ・終わりに、教育予算についてご配慮いただけるよう、重ねてお願い申し上げる。

【閉会】